さくらんぼがり　3

さくらんぼがり　3

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19918585

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ♡喘ぎ, 濁点喘ぎ, んほぉ系, 芹霊

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回は芹霊です。♡喘ぎ、濁点喘ぎ、んほぉ系喘ぎを含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

さくらんぼがり　3

体格を隠すふんわりとしたベージュのロングスカートに、キャミソールの上から大きめサイズの白いシャツを羽織る。
「化けるものですね」
黒い長髪のウィッグを被り、自然な化粧を施せば、霊幻は『わりとこういう人いる気がする』感じに女性に化けていた。
「『化粧』っつーぐらいだからな」
芹沢は納得したように背の高い女性になった霊幻をジロジロと見た。
（本当に仕事には手を抜かない人だなあ）
芹沢は霊幻を尊敬していた。
──その悪癖を知るまでは。
「霊幻せんせ……うわっ！？」
ストーカーに困っている依頼人が相談所のドアを開けて、見知らぬ女性に驚く。
「霊幻先生……ですよね！？」
「ええ、そうです」
にっこりと微笑む、口紅を塗られた唇に依頼人はぽーっと頬を赤くする。
依頼人の好みの姿をしていたらしい。
「では、今日はこの姿でデートしてみましょうか」
「「デート！？」」
芹沢と依頼人が叫ぶ。
「うわっびっくりした。その計画だったでしょう？」
「は、はいっ！」
依頼人は喜びに耳を赤くし。
「……はい」
モヤ、とした気持ちを飲み込んで、芹沢は頷く。
芹沢にとって霊幻は、心から尊敬していた──憧れの人だった。
でも手が届かないと思っていた。彼の前には茂夫が立ちはだかっていたから。

その茂夫の告白の顛末を聞いて、芹沢は霊幻を軽蔑したと思っていた。嫌いにすらなったと。
でも、仕事に打ち込む霊幻を見ると。
ずっと秘めていた想いが、悲鳴を上げるのだった。

すきだ。
すきだ……！
やっぱり、すきだ……！

と。

その人が他の男と腕を組んで、デートに行く姿を見なくてはいけない今回の依頼に、芹沢は深くため息をついた。

※

「はい、あーん♡」
霊幻と依頼人は、大きなパフェを２人で食べさせあっている。
霊幻はニコニコと営業スマイルを浮かべ、依頼人はデレデレと嬉しそうだ。
芹沢は内心のイライラを抑えながらビデオカメラのモニターをチラッと見て、ギョッとした。
写っている。ストーカー疑いの、白いワンピースの女性だ。
（ストーカーが動いた……！）
芹沢は目でも確認する。ストーカー女性は、おおそろしい目つきで霊幻を睨んでいるように見えた。
「じゃあ、行こっか」
依頼人は立ち上がって霊幻をエスコートする。完全にデートを楽しんでいた。
「うん♡」
一方の霊幻は営業スマイルを崩さない。
「ねぇ、今日の記念に、アクセサリーとか買ってあげようか？それとも腕時計の方がいい？」

依頼人はどうやら貢ぎ体質らしい。
「それより……ね？」
くい、と手をホテル街の方に引かれて、依頼人はごっきゅと喉を鳴らす。

「……は？」

思わずビデオカメラを壊しそうになって、慌てて芹沢は力を抑える。
「い、い、いいの？」
「……いいよ♡」
挑発的に微笑んだ霊幻は、く、とアゴを上げて目を閉じた。
「れ、霊幻先生……」
依頼人はがっと霊幻の両肩を掴み、目を閉じて顔を近づける。
「やめっ……！」
思わず飛び出しそうになった芹沢より早く。
「ゴミぃぃいいいいいいい！！」
ストーカー女性がヒステリックに叫んで飛び出し、霊幻を突き飛ばした。
「うわっ！」
転んだ霊幻の上に馬乗りになって殴りつけようとするストーカー女性の手を、霊幻はガシッと掴んだ。
「芹沢、撮ったな！？」
はっと芹沢はビデオカメラを確認する。
「暴行の証拠を押さえました。××さん、警察に電話して下さい」
依頼人は頷いて１１０番にかける。
「ゴミっ！ゴミっ！ゴミいいいいいいいいっ！！！！」
叫んで暴れるストーカー女性の両手を冷静に抑え続ける霊幻に。
何故か芹沢は、胸が切なく痛んだ。

※

「暴行罪でしばらくストーカーは警察にいると思いますし、これで

警察が動いてくれると思います」
「ありがとうございます」
依頼人は深々と霊幻に頭を下げる。
「実は運良く転勤が決まりまして、早めに引っ越そうと思うんです。もう、明日にも」
「なるほど。それは良かった」
営業スマイルを浮かべる霊幻に。
「あの、霊幻さん……」
「はい？」
はく、と空を噛んで依頼人は何かを言いかけ、そして頭を振った。
「……いいえ、何でもないです。本当にお世話になりました」
そう言って依頼人は封筒を差し出し、そして再度深くおじぎした。

依頼人を見送って、芹沢と霊幻は近くのベンチにどっと座り込んだ。
「結構危なかったですね……」
「だなー。ったく、モブもエクボも無断欠勤しやがって……」
ぶつぶつ言いながら霊幻は依頼料から芹沢の分を取る。
「今日はこのまま上がっていいぞ。予約も入ってないし、俺も荷物取ったら帰るわ」
お金を受け取りながら。
「あの……霊幻さん」
「ん？」
芹沢は生唾を飲み込んで。
「童貞なら誰にでもやらせる、って本当ですか」
ぴた、と霊幻の動きが止まった。
「勤務中にプライベートな質問はするもんじゃねぇぞ」
芹沢は霊幻の手からお金をむしり取って。
「もうプライベートです」
そう言い放った。
「……」
霊幻は頭をかく。
「……それ聞いてどうすんの」

「もし。もしですよ。……俺がヤらせてくださいって、言ったら、ヤらせてくれる、んですか」
喉が渇く。芹沢は何度も唾を飲み込んだ。
「……いーよ」
反射的に。
「ッヤらせてください！！」
大声で叫んでしまって、芹沢は赤面した。
「でもさ、オススメしねぇぜ？お前分かってるだろ、俺がどんだけ汚れてるか」
「そん、そんな、そんなこと、」
（汚れてる？依頼人のために身体をはれるこの人が、汚れてる？？？）
芹沢はうまく言えなくて思考をぐるぐると巡らせる。
「最初は好きな人とした方がいいと思うけどなあ」
「なら、なおさらッ！」
ぎゅ、と芹沢は霊幻の手を掴んだ。
もう、霊幻とヤることしか、考えられなかった。
「なおさら？」
「あっ、いえっ、そのっ、俺、霊幻さんと、ヤりたいです……ッ！」
芹沢の必死さに霊幻は吹き出す。
「くっくく……分かった、分かったよ。いいよ、抱いて？」
する、と掴んだ手を恋人繋ぎにされて、芹沢の全身にブワッと熱い汗が吹き出した。
「芹沢の童貞、俺が貰ってあげる」
耳にキスしながら囁かれて、芹沢は思わず周囲の街路樹を浮かしそうになった。

※

「男２人で」
ラブホのフロントで慣れた霊幻が鍵を受け取る。
「３階だって」

「あ、はい」
エレベーターの中で、芹沢はじっとりと霊幻を眺め回す。
女装姿も悪くない、が。
「どうせならいつものスーツが良かったな……」
「ん？」
「あ、いえ、何でも無いです」
何気なく芹沢は霊幻のスカートをめくった。
「……はあ！？」
驚いて霊幻が振り返る。
「あ、結構興奮しますね、これ」
「エレベーターで何してんだよ！芹沢のヘンタイ！」
「はあ、まあ」
これからしようとしてることを考えれば、確かに変態なのだろう、
と芹沢はまんじりと白い足を見る。
「……っ、恥ずかしいから……手、離して……」
顔を赤らめ、ぐい、とスカートを押さえて足を隠そうとする霊幻
に。
ぶわ、と芹沢の欲情が煽られた。
「霊幻さ……」

チーン。

エレベーターが開く。
慌てて芹沢は手を離して、霊幻の後に着いて行った。
「こっち」
霊幻がドアを閉めて施錠した瞬間。
「ふぐっ」
芹沢は霊幻のアゴを掴んで、がむしゃらに口付けた。
「ん、あ、んぅ……っ」
霊幻は目を閉じてガチガチと歯の当たるキスに応える。
「ふっ、ふっ、」
ケモノのような息を漏らしながら、芹沢は霊幻のキャミソールの胸
をまさぐる。

「ん、ん……っ」
キスしながら乳首をかすめられて、霊幻がピクンと反応した。
「……霊幻さん」
自分の指に反応した霊幻に芹沢はチリチリと煽られる。
「せりざわ、じゅんびさせて、おねがい」
「は、い」
口が離れた隙を逃さず、霊幻は芹沢に懇願した。
もう芹沢のズボンには痛いほどテントが張られていた。
霊幻がトイレに消え、芹沢はどうしていいか分からず立ち尽くす。
ドキドキしながら、トイレのドアを見つめていた。
「……おまたせ」
出てきた霊幻の気だるげなようすが、芹沢にはたまらない。
「ウィッグ外していい？これ結構暑くて」
ぶんぶんと芹沢は頷く。
ピン留めされたウィッグとネットが外されて、蜂蜜を煮詰めたようなキラキラした髪が出てくると。
（霊幻さんだ）
そう思えて、芹沢は興奮した。
「好きです、霊幻さん」
ぐいと腕を引っ張り、その身体を抱きしめて芹沢は告げる。
「うん。俺も好きだよ、かつやくん♡」
抱きしめ返してきた腕に、芹沢の頭が沸騰した。
（嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい大好きだ大好きだれいげんさんれいげんさんれいげんさんれいげんさんれいげんさん……！）
「新隆って呼んで♡」
可愛く霊幻に言われて、あらたかっ！？と芹沢は大声で鸚鵡返ししてしまった。
「い、い、い、いいんですか！？」
「もちろん」
ツバで喉を湿らせて。
「あ、あらたかくん」
「うん♡なーに？」
きゅううん、と芹沢の胸が締め付けられる。

「君を抱きたい」
「もうヤってるじゃん」
セックス、と熱っぽく耳に吹き込まれて、芹沢はくらくらする。
「……新隆さん、スカート自分で持って貰っていいですか？」
「え゛っ」
しばらく2人は睨み合う。
が、観念して、霊幻はスカートを自ら両手でたくし上げて、『はいどーぞ』と芹沢に晒した。
「すごい……エッチだ……」
「……っ、させてるのお前だろ……！」
スカートを自分からめくって見せる行為は、妙にふしだらに芹沢には思えた。それがたまらない。
羞恥にかすかに震える白い足に、芹沢はひざまずいて舌を這わせ、手で撫で回す。
「あ……」
性を思わせる触れ方に、霊幻は掠れた声を上げた。
その声に思わず芹沢は、ちゅ、と内腿を吸い上げる。
「ん……！」
残ったキスマークを、満足げにベロリと舐めた。
「嬉しいな……霊幻さんも興奮してくれてる」
女物の白いレースのショーツに包まれた霊幻の性器は、こぼれんばかりに膨張している。
「だって、かつやくんとできるの……すごくうれしい……っあ！」
思わず芹沢はその大きな口で、ガブリと霊幻のモノにかぶりついた。
「ゃんっ！あ、や、やだぁ……っ♡」
そのまましゃぶりつつタマを揉み始めた芹沢に、イヤイヤと霊幻は少し身をよじらせる。
「ろうしてでふか？」
「お風呂入ってないから……ばっちいだろ？口でしなくたって……」
いやむしろ佳い。
霊幻の恥じらいに芹沢の理性が吹っ飛ぶ。

「霊幻さんくさくて、最高です」
「やだぁ……っ♡あ、あっ……！」
思わず芹沢を押し返そうとしてスカートから手を離すと、ばさりと芹沢がスカートの中に入り込む形になった。

──スカートに潜り込んだみたいで、興奮する。

そう思った芹沢は、霊幻の性器をめちゃくちゃにもてあそんだ。
「ひ！？あ、やだ！せりざ、何して……っ、あ、あ……！」
見えないスカート中で行われる性戯は、あっという間に霊幻を追い詰める。
「ひ……っ！」
じゅる、と音を立てて何かをされて、それが腰にじぃんと甘い痺れを落として。
「かつやぁ……っ♡イくぅ……っ♡♡♡」
がくがくと震える霊幻の足を支えながら、じゅるっと芹沢が残滓を啜った。
「はぁ……はぁ……」
ずるりとスカートから這い出た芹沢は、服を脱ぎながら霊幻をベッドに誘導する。
「……克也のも舐めてあげよっか？」
とさ、とベッドに座りながら、霊幻が訊いた。
「いや、それよりパイズリお願いしていいですか」
「ぱいずり」
ぺた、と思わず霊幻はキャミソールの平たい自分の胸を触る。
「いや俺オッパイ無いけど」
「あるじゃ無いですか、乳首とか」
ぎし、と音を立てて霊幻をベッドに押し倒す。
「んっ……」
キャミソールの中に手を差し込んで一通りまさぐって感触を楽しんでから、芹沢はキャミソールをたくし上げた。
「霊幻さんの乳首、興奮します」
息を荒げながら芹沢は怒張を霊幻の乳首に擦り付けた。

「ん、っ♡」
粘膜と薄い皮膚が擦れる感触が、独特の性感を霊幻にもたらす。
「れいげんさんッ、れいげんさん……！」
霊幻の上気した顔を見ながら、芹沢は必死に腰を振る。
芹沢にとっては、霊幻のすべすべした肌と、小さな突起が、たまらなくエロかった。
「霊幻さん、乳首たってきましたね？き、気持ちいいんですか、パイズリされて、気持ちよくなっちゃうんですか？」
「ン……」
こくん、と恥ずかしそうに頷いたのを見て。
「う……っ」
びゅるる、と芹沢は霊幻の顔や乳首、キャミソールに盛大にぶっかけてしまった。
「わっ！……出すなら出すって言えよ、馬鹿っ」
「す、すみません」
ティッシュを取りながら、霊幻がぶつぶつと文句を言う。
「目に入らなかったからいいものの……えっ何？」
「あの」
くに、と勃起した乳首を指でいじりながら言いにくそうに芹沢が目を逸らす。
「キャミソール、下にずらして乳首舐めてもいいですか」
「…………好きにしろよ」
レースが可愛らしいブラウンのキャミソールは、霊幻の白い肌によく映える。
「……っ」
それを一旦下ろし、芹沢は上側を指でくいと引っ張って乳首を露出させた。
「わ、エロいなあ」
「だから……っ」
霊幻の抗議は芹沢の舌に吸い込まれた。
「ぅ……あ♡」
片方の乳首をたどたどしく舐められ、もう片方はキャミソールのレースの端でピン♡ピン♡とはじかれる。

「それっ……結構、ヤバ……っ♡」
いつもとは違う感覚に霊幻が思わず芹沢にしがみつく。
「や……♡あ、ああ……ッ♡」
「霊幻さん……たまらないです。もう挿れたい……」
エロチックな姿で身悶える霊幻に芹沢は辛抱がきかなくなった。
「ん、いいよ♡……ちょっと待ってな、ゴム出すから」
霊幻は芹沢を押し除けて、自分の鞄の中を漁る。
「これでいけそうか？」
「たぶん……」
ＬＬサイズのゴムを見せて、霊幻はそれを着けてやる。
「キツい？ような気も……」
「お前のおっきいもんなあ」
霊幻はベッドに横たわり、ショーツを脱ぎ捨ててスカートをめくって見せる。
「おいで♡」
「っ霊幻さん……！」
芹沢はがばりと霊幻の足を押し広げ、スカートをしゅるりと完全に上げ落とした。
「ゆっくり……な？」
ぐぷ、と芹沢が先端を押し込んで。
「かは……っ！」
霊幻はその太さに目を見開いた。
「せりざ、わっ？あのさ、ここで、止めるとか……」
「先っちょだけで！？冗談でしょう」
逆に焦ってしまった芹沢は性急に怒張を進めてしまう。
「あ゛あ゛あ゛あ゛っ♡」
無理矢理媚肉を引き裂かれて、ごちゅんと奥までえぐられた霊幻はぴゅるると精をこぼした。
「ま、って……まってぇっ♡」
「れいげんさん……めちゃくちゃきもちいいですっ……！」
ずるるる。ずちゅん。
「あ゛ーっ♡♡♡♡」
無遠慮に引き抜かれて打ち貫かれて、力無く霊幻の足が宙を蹴る。

「イっ……♡イって、う……♡」
「イきそうですか！？ならもっと激しくしますね！！」
嬉しそうに芹沢はすでにイき狂ってる霊幻の足を持ち上げ、

ごちゅん、と、

思いっきり種付けプレスを、何度もキメた。

「んﾞおﾞおﾞおﾞおﾞおﾞ♡♡♡♡」
霊幻は首を逸らせてバチバチと目の前が爆ぜる快感に耐える。
「うっ、そんなに締めないでくださいよ……」
ドピュルルル、とゴムごしに中出しされる感覚に、霊幻はピクピクと震える。
「おれぇ……♡壊れちゃうぅ……♡んﾞあﾞっ♡♡♡」
外したゴムを適当にその辺にほったらかしてすぐ次をつけ、また打ち込んできた芹沢に、霊幻は甘く悲鳴を上げた。

※

「あー負け。今回は俺の負けだわ。お前のチンポには大敗北」
「えっ」
翌朝に笑いながら言う霊幻に、芹沢は喜びを表す。
「じゃあ、俺と付き合ってくれるんですか？」
「は？なんでそうなる」
しばし沈黙が２人の間に落ちる。
「俺とのセックス、良かったんですよね？」
「めちゃくちゃな」
「霊幻さん、俺のこと好きなんですよね？」
「まあ、普通に」
「え、じゃあ付き合いましょうよ」
「いや付き合わないけど」
かく、と芹沢の膝が折れる。
「なんでですか……」

「もう俺、そういうのいいんだよ」
ちゅ、と霊幻は芹沢の頭にキスをする。

「童貞捨てれたんだからいいだろ？」

「「「いいわけあるかぁっ！！！」」」

続